

武蔵野日曜集会

聖霊の力

――ロマ書第15章、16章――

1978年12月17日(武蔵野)

小池辰雄

聖霊の力 主イエス・キリストは一つ キリストの割礼は贖罪の十字架 聖霊の力にある希望
徴と不思議との能力 至道無難 太陽の光を現していることにおいて一つ 神主人 キリスト
の中に抱きつくように自分を投げ入れる 力ある聖霊が内住すること

【ロマ15】

1 われら強き者はおのれを喜ばせずして、力なき者の弱きを負うべし。2 お
のおの隣人の徳を建てん為に、その益を図りて、之を喜ばすべし。3 キリス
トだに己を喜ばせ給わざりき。録して『なんじを誘う者の誘は我に及べり』
とあるが如し。4 夙くより録されたる所は、みな我らの教訓のために録しし
ものにして聖書の忍耐と慰安とによりて希望を保たせんとてなり。5 願わく
は忍耐と慰安との神、なんじらをしてキリスト・イエスに倣い、互いに思い
を同じうせしめ給わん事を。6 これ汝らが心を一つにして口を一つにして我
らの主イエス・キリストの父なる神を崇めん為なり。

7 此の故にキリスト汝らを容れ給いしごとく、汝らも互いに相容れて神の
栄光を彰すべし。8 われ言う、キリストは神の真理のために割礼の役者とな
り給えり。これ先祖たちの蒙りし約束を堅うし給わん為、9 また異邦人も
憐憫によりて神を崇めんためなり。録して『この故に、われ異邦人の中にて
汝を讃めたたえ、又なんじの名を謳わん』とあるが如し。10 また曰く『異邦
人よ、主の民とともに喜べ』11 又いわく『もろもろの国人よ、主を讃め奉れ、
ものもろの民よ、主を称え奉れ』12 又イザヤ言う『エッサイの萌蘖生じ、異
邦人を治むる者、興らん。異邦人は彼に望みをおかん』13 願くは希望の神、
信仰より出づる凡ての喜悦と平安とを汝らに満たしめ、聖霊の能力によりて
希望を豊かならしめ給わんことを。

14 わが兄弟よ、われは汝らが自ら善に満ち、もろもろの知識に満ちて互い
に訓戒し得ることを確く信ず。15 然れど我なお汝らに憶い出させん為に、こ
こかしこ少しく憚らずして書きたる所あり、これ神の我に賜いたる恩恵に因
る。16 即ち異邦人のためにキリスト・イエスの仕人となり、神の福音につき



て祭司の職をなす。これ異邦人の聖霊によりて潔められ、御心に適う献物とならん為なり。¹⁷然れば、われ神の事につきては、キリスト・イエスによりて誇る所あり。¹⁸我はキリストの異邦人を服わせん為に我を用いて言と業と、¹⁹また微と不思議との能力、および聖霊の能力にて働き給いし事のほかは敢えて語らず、エルサレムよりイルリコの地方に到るまで遍くキリストの福音を充たせり。²⁰我は努めて他人の置えたる基礎のうえに建てじとて未だキリストの御名の称えられぬ所にのみ福音を宣伝えたり。²¹録して『未だ彼のことを伝えられざりし者は見、いまだ聞かざりし者は悟るべし』とあるが如し。

²²この故に、われ汝らに往かんと為しが、しばしば妨げられたり。²³然れど今は此の地方に働くべき処なく、且つなんじらに往かんことを多年、切に望みいたれば、²⁴イスパニヤに赴かんとき立ち寄りて汝らを見、ほぼ意に満つるを得てのち汝らに送られんことを望むなり。²⁵されど今、聖徒に事えん為にエルサレムに往かんとす。²⁶マケドニヤとアカヤとの人々はエルサレムに在る聖徒の貧しき者に幾許かの施与をするを善しとせり。²⁷実に之を善しとせりまた聖徒に対して斯くする負債あり。異邦人もし彼らの霊の物に与りたらんには、肉の物をもて彼らに事うべきなり。²⁸されば此のことを成し了え、この果を付してのち、汝らを歴てイスパニヤに往かん。²⁹われ汝らに到るときは、キリストの満ち足れる祝福をもて到らんことを知る。

³⁰兄弟よ、我らの主イエス・キリストにより、また御霊の愛によりて汝らに勧む、なんじらの祈りのうちに、我とともに力を尽くして我がために神に祈れ。³¹これユダヤにおける従わぬ者の中より我が救われ、又エルサレムに対する我が務めの聖徒の心に適い、³²かつ神の御意により、歡喜をもて汝等にいたり、共に安んぜん為なり。³³願わくは平和の神なんじらの衆と偕に在さんことを、アアメン。

【ロマ16】

¹我ケンクレヤの教会の執事なる我らの姉妹フィベを汝らに薦む。²なんじら主に在りて聖徒たるに相応しく、彼を容れ、何にても其の要する所を助けよ、彼は夙くより多くの人の保護者また我が保護者たり。

³プリスカとアクラとに安否を問え、彼らはキリスト・イエスに在る我が同労者にして、⁴わが生命のために己の首をも惜しまざりき。彼らに感謝するは、ただ我のみならず、異邦人の諸教会もまた然り。⁵又その家にある教会にも安否を問え。又わが愛するエパネトに安否を問え。彼はアジアにて結べるキリストの初めの実なり。⁶汝等のために甚く勞せしマリヤに安否を問



え。⁷我とともに囚人^{めしうど}たりし我が同族アンデロニコとユニアスとに安否を問え、彼らは使徒たちの中に名声^{きこえ}あり、かつ我に先だちてキリストに帰せし者なり。……

¹³主に在りて選ばれたるルポスとその母とに安否を問え、……

¹⁶潔き接吻^{くちづけ}をもて互いに安否を問え、キリストの諸教会みな汝らに安否を問う。……

²⁰平和の神は速やかにサタンを汝らの足の下に砕き給うべし。

願わくは我らの主イエスの恩恵、なんじらと偕に在らんことを。……

²⁵願わくは長き世のあいだ隠れたれども、今顕れて、²⁶永遠の神の命にしたがい、預言者たちの書によりて信仰の従順を得しめん為に、もろもろの国人に示されたる奥義の黙示^{しかた}に循える我が福音と、イエス・キリストを述ぶる事とによりて、汝らを堅うし得る、²⁷唯一の^{かしこ}智き神に栄光、世々限りなくイエス・キリストに由りて在らんことを、アアメン。

●聖霊の力

¹われら強き者はおのれを喜ばせずして、力なき者の弱きを負うべし。

パウロという人は非常に健全な構造です。「強き者」というのは信仰の上で強き者ということ。もちろん、パウロは信仰を私して、「強い」なんて言っているのではない。賜りたる強さです。自分の側は無です。「強き者」というのは「デユナトイ」といつて、「デユナミスを持つている者たち」ということ。ダイナミックな人たち。これは聖霊のダイナミックスだよな。

今日の題は「聖霊の力」という。私は聖霊の力でなければ、もう動けない。いよいよもつてそういうことです。その

「強き者はおのれを喜ばせずして」

という。「おのれを喜ばす」というのは、いわゆる自己満足的なことではない。そういうことはダメだと。喜びはありますよ、強き者だつて。溢れてくる喜びはあるけれども、それを目的とするようなことではダメだということ。楽しみというものが目的になったら、いわゆる幸福主義になる。本当のことをやっている、楽しさが湧いてくるんです。随伴現象はかまわない。それをなにも苦虫を食いつぶしたような顔している必要はひとつもない。そんなことをしていると反つて偽善になる。うれしいなら、うれしくして一向差し支えない。うれしさを求めるのはいいかん。ヒルティの『幸福論』というのがあるが、幸福を求めたらダメなんです。天的な幸いということ。私は天の恵みという言葉は好きだが、「天恵」が本当の幸福なんだ。私はよく手紙に「天恵」という字を書きます。

「力なき者」とは、「アデユナトイ」といつて、「ア」という否定の字がつくと、「力なき者」



になる。聖霊の力ある者は聖霊の力なき者を負わなくてはいかん、背負わなくてはいかんと。それはさすがにパウロの言葉ですね、「負え、担え」と言う。道を歩いていても、困っている人や疲れた人があつたら、おぶつていく。力ある者が力なき者を負うという。これが聖霊の愛です。

パウロは、「担うべし」と、命令的な言い方が相当ありますね。「担うべきである」という、そういう「義務のある」という字です。もう一つ奥を言えば、

「担うことになるぞ。担わざるを得ないぞ」

ということですよ。本当の聖霊の力なら、助けてやりたくなる。「べきである」ではないんだ、本当は。

●主イエス・キリストは一つ

2 おのおの隣人の徳を建てん為に、その益を図りて、之を喜ばすべし。

非常に道徳的な次元にのりたようなことを言っている。「徳を建てんために」という字は、今でいうと、「教養へと喜ばせる」という言い方をしています。善き教養だね。ドイツ語でいうと、「ビルドゥング」です。ここは「徳」という言い方で結構ですが。

3 キリストだに己を喜ばせ給わざりき。

キリストさえも――「さえも」どころではない――キリストこそは己を喜ばせなかった。自分自身を喜ばせなかった。

録して『なんじを誇る者の誇は我に及べり』とあるが如し。

これは詩篇69篇9節の言葉だな。「なんじ」というのは神さまのこと。

「神さまを誇る者の誇りは我に及んだ」

と。この場合、キリストならば、キリストに及んだ。特にこれは「七十人訳聖書」によってパウロはこの言葉を引用した。神さまを喜ばせる、神さまを誇るといいのはいいのだけれども。

4 夙くより録されたる所は、みな我らの教訓のために録ししものにして聖書

の忍耐と慰安とによりて希望を保たせんとてなり。

「夙くより録されたる所」とは旧約聖書です。

5 願わくは忍耐と慰安との神、

繰り返して書いてあるね。この「忍耐と慰安との神」という言い方は他の書簡にもあります。

なんじらをしてキリスト・イエスに倣い、互いに思いを同じうせしめ給わん事を。

祈っているわけだな。この悪の世においては、「耐え忍び」ということがどうしても必要なわけだ。あまり、私みたいにすぐ怒ったりしない方がいい。「キリスト・イエスに倣いて」という。倣ったって、ただ模倣したってダメです、キリスト・イエスに従わないと。



⁶これ汝らが心を一つにして口を一つにして我らの主イエス・キリストの父なる神を崇めん為なり。

「二つ、一つ」という言い方はエペソ書の4章あたりにたくさん出てきましたね。心を一つ、口を一つ。信仰は一つ、神は一つ、キリストは一つ、聖霊は一つと。

「³平和の繋のうちに勉めて御霊の賜う一致を守れ。⁴体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望をもて召されたるが如し。⁵主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、⁶凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。」(エペソ4:3-6)

「神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう」

と。ここのところは非常に私の好きな言葉です。神さまの超在、内在、遍在、貫在。到るところに神在りと。そう言う、「パウロは少し汎神論的だ」と、くだらないことを言うやつがある。「だから、エペソ書はパウロが果して書いたのか」なんてことまで言う。何を言ってるかと言いたくなる。聖霊のものの凄い世界に入ると、そんなくだらない議論はなくなってしまうよ。

「心を一つ、口を一つ」と言ったって、外側からいくら「心を一つ、口を一つ」と言ったってしょうがないんだ。どうして、そうなんですか。

「心を一つにして、口を一つにして、我らの主イエス・キリストの父なる神を崇めん為なり」

と言うけれども、これは主客転倒しているんですよ。「我らの主イエス・キリストは一つ」でしょうが。この一なる驚くべきキリストに向ってごらんさないよ、心は一つにならざるを得ない。口は一つにならざるを得ない。先にこちらを一つにしてキリストに行くのではない。キリストが主体ですから、そうするとこっちは、心は一つになってしまう。だから、「キリストを本当に崇めれば、心は一つになるぞ、口も一つになるぞ」と、私はパウロにそう言ってもらいたかった。そういう訳し方をしてみようかね。パウロ先生は怒りはしないよ、「ああ、それはその通りだ」と。

なにかみんな、文字に囚われるから、分からなくなってしまう。そして苦しくなってしまう。そこに流れている事態は一体、何事かと。いつもキリストが中心になっていなければダメですよ。キリストから限らない光が出ているのだから。

こっち側は一つにしたってダメなんだ。こっちに人はたくさんいるんだ、いろいろ。心は様々なんです。心は様々なんだが、この一つなるキリストがこの様々な心に向っていると、これが全部、円環的な一つになってしまう。「一つ」というのはそういうことです。いわゆる全体主義的な一つではないですよ。人間の心の感じ方というのはいろいろだよな。



「けれども、キリストがもう私の心を占領している」

というわけです。この心はいろんな心があるけれども、キリストに占領されると、姿はいろいろだけれども、一つなんだ。

●キリストの割礼は贖罪の十字架

⁷此の故にキリスト汝らを容れ給いしごとく、

キリストが私たちを容れてくださった容れ方は、十字架の容れ方だから、大変な容れ方です。

汝らも互いに相容れて神の栄光を彰すべし。

「我らも互いに相容れて神の栄光を彰そう」

と、パウロは時々、「我ら」と言ってくれた方がよかったね、「汝ら、汝ら」と少し威張ったようなところがある。パウロは威張ってはいませんが、いわゆるお説教調に聞いたら、パウロを聞き損なう。パウロの言葉の奥の本当のパウロの気持ちを讀みながら讀まないからね。言葉というやつは困ったものだ。私は本当に楽しいんですよ。

キリストの十字架で容れられましたからね。本当にキリストの愛で容れるんですから、そうすると、そこには神の栄光が顯れる。

「この故にキリスト汝らを容れ給いて、神の栄光を彰し給いしごとく、汝らも互いに相容れよ」

と、そう読む方がいい。

「神さまの栄光をキリストは十字架の愛をもって彰した。そのようにして相容れなむ」

と。

⁸われ言う、キリストは神の真理のために割礼の役者となり給えり。

ちよつと不思議なことが書いてあるね。これはパウロがちよつとユダヤ人の割礼を逆説的に使ったんです。マタイ伝20章28節、

「²⁸斯のごとく人の子の来れるも事えらるる為にあらず、反って事うることをなし、

「事うることをなし」というのは、「僕となり」ということです。神の僕となって、

又おおくの人の拯贖として己が生命を与えん為なり」(マタイ20・28)

これは贖罪のことです。それが「割礼の役者」なんです。キリストの割礼はそういうんです。

これ先祖たちの蒙りし約束を堅うし給わん為、⁹また異邦人も憐憫によりて

神を崇めんためなり。録して『この故に、われ異邦人の中にて汝を讃めたたえ、

又なんじの名を謳わん』とあるが如し。

詩篇の18篇です。



10 また曰く『異邦人よ、主の民とともに喜べ』
申命記32章。

11 又いわく『もろもろの国人よ、主を讃め奉れ、ものもろの民よ、主を称え奉れ』

詩篇117篇1節。パウロはよく旧約を引用するね。熟読しているから。

12 又イザヤ言う『エッサイの萌蘖生じ、異邦人を治むる者、興らん。異邦人は彼に望みをおかん』

イザヤ書11章10節の有名な言葉。キリストの預言です。

●聖霊の力にある希望

13 願くは希望の神、信仰より出づる凡ての喜悦と平安とを汝らに満たしめ、聖霊の能力によりて希望を豊かならしめ給わんことを。

今日の題目はこの「聖霊の能力」という言葉を持ってきた。「希望の神」というのは、希望を与える神ですよ。神さまが希望を待っているのではない。希望を与える神。「信仰より出づる」というのは、「信仰にある」「エン・ピストー」です。

「信仰にあるところの凡ての喜悦と平安をお前たちに満たしめ」

ということ。「信仰にある」ということは、「聖霊の力にある」ということです。「力によりて」というのも、「力にあつて」です。

「聖霊の力にあつて希望を豊かならしめ給わんことを」

と。聖霊の力があると、おのずから希望がそこにやってくる。聖霊は神が愛をもって賜った霊ですから。聖霊の第一の内容は愛です。この神の愛は最大の力を持っている。

これはゲーテもダンテもその詩で歌っている。私の『芸術の魂』に書いてあったでしょ。あの私の本を読んでね、なにかダンテやゲーテの恋愛のことを語っていると思つては困るよ。現象は、恋愛の現象はあるさ。けれども、彼らが本当になぜ凄いかというと、やはり天来の愛の力を持つているから。それが男女の関係では恋愛になったり、親子の関係では親子の愛になったり、いろいろ変貌するだけのななしさ。それが本当の恋愛であり、本当の親子の情であり、本当の友情であるためには、みんな上から来てなければダメです。そうでないような恋愛はくずれてしまう。だから、根源の愛が千変万化して表れる。そこはゲーテもダンテもつかまえる。特にゲーテはその点では幅が広い。これがなかなか読めないんだね。

「信仰にあつて凡ての歡喜と平安」

という。聖霊によるところの信仰というものは、うれしくてしょうがない、なにか全てが喜ばしく見える。そして、心には本当の平安がある。この平安は力を持っています。ただ無事息災なんているのではないですよ、この平安というのは。平安というのは縦の関係だから、



力が来ている。魂の安けさというのは、力があるから安けさがあるので、どんな運命環境になろうと、どっこいという、それが平安というものだ。その力がなかったら、そうはいかない。だから、私はどなたにも手紙の封書の表に必ず「平安」と書くんです。

「あなたに平安があるように」

という意味です。そういう文句は書けないから、ただ「平安」と書いている。形式で書いているのではないよ、私は必ず祈りをもって書いている。「祈ります」と書く時には、必ずその瞬間に私は祈るんです。御霊の信仰以前には、観念のときは、私はそういうことはよく分からなかった。

「歓喜と平安を汝らに満たし、聖霊の能力にあつて希望は豊かにならざるをえない」

と。豊かになってまいります。

14 わが兄弟よ、われは汝らが自ら善に満ち、もろもろの知識に満ちて互いに訓戒し得ることを確^{かた}く信ず。

「善」は道德の世界、「知識」は学問。けれども、この場合の「知識」はただ学問ではない。

15 然れど我なお汝らに憶^{おも}い出させん為に、ここかしこ少しく憚^{はば}らずして書きたる所あり、

おもしろい言い方をしているね。幾分、顧慮することなしに書きたるところありと。

これ神の我に賜^{めぐみ}いたる恩恵に因る。16 即ち異邦人のためにキリスト・イエスの仕人^{つかえびと}となり、神の福音につきて祭司の職^{つとめ}をなす。

「仕人」も「祭司」も同じようなものだな。

これ異邦人の聖霊によりて潔められ、御心に適^{あた}う献物^{さげもの}とならん為なり。

これも「聖霊の中で潔められ」です。実存そのものが「献物」であるというわけです。我々の生活それ自身が神への献げである。

●徴と不思議との能力

17 然れば、われ神の事につきては、キリスト・イエスによりて誇る所あり。

この「によりて」も「キリスト・イエスに在つて」です。

18 我はキリストの異邦人を服^{したが}わせん為に我を用いて言と業と、

言と業とをもって、

19 また徴と不思議との能力^{ちから}、

これも「能力において、能力のうちに」という言い方です。

および聖霊の能力にて

聖霊の能力において、能力のうちで、

働き給いし事のほかは敢えて語らず、エルサレムよりイルリコの地方に到る



まで^{あまね}遍くキリストの福音を^み充たせり。

小アジア半島です。パウロの第一、第二伝道がみなそれです。ここところは非常に大事なところですよ。

「然れば、われ神の事につきては、キリスト・イエスに在つて誇る所あり」

と。私の一切はキリスト・イエスの中にあつて、「エン・クリスト」であるから、神さまを誇らざるを得ないと。何を誇るかというと、神さまのさせたことを誇る。

「我はキリストの異邦人を^{したが}服わせん為に我を用いて」

と。即ち、パウロは異邦人の使徒となつたでしょ。ペテロは主にユダヤ人の方でしたけれども。

「言と業、また徴と不思議との能力において働き給いし事のほかは敢えて語らず」

「徴」(セイメイオン)と「不思議」(テラス)です。「徴」はむしろ現象的な面です。「不思議」の方はもう一つ奥のもの。徴や不思議が現れるのは、もう一つ奥の力があるからです。それが即ち、聖霊の力なんです。「言と業」と言い、それから、「徴と不思議」と言う。これは全部、聖霊の力によつて動くわけです。もし、分析するなら、業は、徴と不思議においてこの業が現れ、また、言は、聖霊がそこにおいて言を通して現れてくる。霊言、一如です。それをこういう畳みかけて重厚な言い方をしているわけです。

「働き給いし事のほかは敢えて語らず」

と言うんですから。そして、

「エルサレムよりイルリコの地方に到るまで遍くキリストの福音を充たせり」

というのは、キリストの福音とはそういうものだと言う。キリストの福音というのは、聖霊の力によつて言にも現れ、業にも現れ、それが不思議ともなり、徴ともなる。そうでないようなものはこのキリストの福音ではないんだと。「その他のことは語らない」といつたつて、パウロの福音というものは全的にそういうものだ。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストが言われた。キリストは、言に力があつた。だから、「立て！」と言えば、跛者が立つてしまった。ペテロもそれをやつた。パウロもやつた。みんなこれは、御霊が中心であるから。

「エン・クリスト」というのは「キリストの霊の中に」ということだものね、「キリストの中に」ということは。それが現れて、口に表れては言となり、手足に表れては行為となる。しかも、その言を通してまた行為が派生してくる。もう大変なものだ。それが実に不思議なことだ。不思議となり徴となる。

「ユダヤ人が徴に躓いた」

というのは、徴を目的とすれば、徴に躓くんです。これは御利益宗教になつてしまふ。あ



りがた宗教になってしまふ。ありがたいと思うことは結構だけれども、何ありがたいか。この徴を通して根源の世界に入れば本当にありがたいんです。徴を通して、「ああ、病気が治りました。ありがたいし、ありがたい」では、これは御利益宗教です。一体、私の病気を治したものは何かと。病気が治らないこともあるさ。相対的な人間の罪の現実だもの。いつかはみんな死ぬよ。けれども、死んでも死なない世界を持たなくてはいかん。この聖霊は永遠の生命を、不死の世界を持っている。そうでないいわゆる御利益宗教、徴と不思議にこだわっているような宗教や――新興宗教にだいたいその角度があるようだな――非常に観念で聖書知識に誇つてみたり、ただ信仰のすじばかり問題にしてみたり、神学をいじくつてみたり、みんなこれはダメです。パウロの神学は生きた神学なんだから、解剖したら死んでしまうよ、そんな神学は。本当の神学は神学を嘲るんです。

いつも元に戻る。これが「南無」ということ、帰入することです。「南無」というのは素晴らしい言葉だね。

●至道無難

これは碧眼録の第二則の頌じゆです。

「至道難かたきこと無し、言端ごんたんにして語端ごごんなり。

一に多種ふたとおろし有り、二に兩般ふたとおろし無し。

天際てんがいに日ひ上り月下り、檻てすりの前に山深く水寒つめたし。

觸ふ體識てくしき尽つくきて喜何きおぞ立たらん、

枯木こぼく龍吟りゆうぎんして銷きゆるも未だ乾かかず。」

「至道無難」。至る道は、最高の道は難からずという。これだけのことを言えるのは大変なことですよ。「大道無門」だとか、愉快だね。

「大道無門、千差路せんしやみち有り。」

此の関を透得てうとくせば、乾坤けんこんに独歩どくぽせん」

なんて、漢詩はいいね。

「至道無難、言端語端」

言語の端。いろいろな言葉があるわけです。それは、

「二に多種ふたとおろし有り」

と。言葉というのは一つだけれども、それはいろんな種類のものがあると。言葉は言葉だけれども、それはいろんな種類のものがある。

「二に兩般ふたとおろし無し。」

二であつて兩般ではないと。「二」というのは絶対界と相対界。あとに出てくる、「明白」というのは絶対のことです。「揀けん択てく」というのが相対の方。

「天際てんがいに日ひ上り月下り、檻てすりの前に山深く水寒つめたし。」



空の涯に日が上れば、また別の空の涯には月が下りてくる。欄干の前に山が深くして水が寒いと。その光景をそのまま叙した。そういう自然の法則がある。

「どくろしき 髑髏識尽きて喜何ぞ立らん、」

髑髏はもう死んでいるから、意識が尽きている。喜びがとどまることがあるのか、喜びは尽きないんだと。髑髏は死んでいるから尽きているけれども、喜びはそれで無くなってしまうのではない。死んだような顔している髑髏の中にも喜びはあるんだよと。えらいことを言っている。死んでも死なないんだぞと。ゲーテの『ファウスト』の中にも髑髏のことを書いているところがある。「こちらを見ているようだ云々」と書いてある。

「こぼくりようぎん 枯木龍吟して銷ゆるも未だ乾かず。」

枯れた木が、風が吹いてくると、龍のごとくにウーッと唸りを発する。古木龍吟だが、未だ乾いて銷えてしまったわけではないぞ。まだ古木の中に生命があるんだ。ああやって唸るではないかと。

「こぼくりようぎん 枯木龍吟して銷ゆるも未だ乾かず。」

そういうわけだが、こういう現実を本当にお前は自分のものにするのはなかなか難しいぞ。至道無難であるけれども、逆説的に言うと、まことに難しいぞということです。難にして無難という。相対界と絶対界を、自分で本当に見てみる。そうすると、相対界において絶対を見れるぞ。こういった相対的な髑髏や古木のところにおいて絶対の境地を見ろという。

●太陽の光を現していることにおいて一つ

さつき6節で、

「これ汝らが心を一つにして口を一つにして云々」

と言ったけれども、これはキリストを中心にするれば、多種多様なただけれども一つなんです。

「二多種あり。多種一なり」

と逆に言ったっていいわけです。

花はいろいろな花がある。百花繚乱である。けれども、これは太陽の光を受けたということにおいて、太陽の光を現していることにおいて一つなんです。現象面は多種でいい。その奥は一つなんです。だから、多種にして一つ。「二にして両般なし」と。絶対と相対は二だけれども、それはただ二個ではないぞと。「二にして両般にあらざ」というのはそのことなんだ。なかなか難しいね。むしろ一如です。

「二即多、多即一」

なんです。これがパウロが、人間の身体はいろんな部分があるが、結局これは頭を中心にして一つ、大きな有機体的になつていないかと言っている。

だから、様々の職業がある。いろんな職業があるからこの社会は成り立っているのに、みんなが先生になつたらどうするのか。みんなが左官屋になつたらどうするんだと。だから、



職業に貴賤なし。みんな天賦天職で、自分の本当に好きなやりたいことをやっていけ。打ち込めと。

今の教育はまちがっているよな。教育制度がそういうことをわきまえた哲学的な角度から教育制度ができていないから。宗教的哲学的な角度からね。それでもう結局、「受験、受験」の大騒ぎ。何年たつてもどうにもならん。それで、「教え方がどうだ、何だかんだ」と瑣末なことを言ってもどうにもならん。

私が一人で学校を開けば、そういう教育を本当にしたいよ。それをしたいけれども、もう私はできないし、時間もないから仕方がない。福音の角度からそのことを天下に説かなければならない。大言壮語するのでも何でもない。これはもうしょうがないよ。キリストの直弟子のパウロさんやなんかと共鳴してきたんだから。いわゆるカトリックにあらず、いわゆるプロテスタントにあらずと。ね、愉快でしょ。

こういう言葉も、要するに聖霊の光で、聖霊の力で読むと、何ということはない。ちゃんと読めてしまう。聖霊がなかったら、「さあ大変だな、碧眼録なんてものは」と、お手上げになってしまう。そうじゃない。

私は「古木龍吟」という言葉は好きだ、自分が辰年だから。私もそろそろ枯れたような人間だけれども、これは聖霊の風を受けて音を発するから、これからだんだん。これを「天韻」という。天の韻おとを発する。

●神主人

もう、この世界にきたら、聖霊がなかったら生きてられないですよ。生命はないですよ。御霊があるから、私はこの生命があるのでね。

「どうして、小池先生というのは75歳なのにあんな(若々しい)顔しているか」と。しょうがないよ。お客さんが来るたびに私にそう言う。

本当にへこたれないためには、聖霊の力なんです。人生のマラソン競争で本当の勝利者となるときには、聖霊の力がなかったら勝利者にはなれない。もうハッキリしている。男でも女でも。

だから、パウロがここでもって畳みかけて言っているわ。これでパウロはあの当時の地中海を突っ走ったわけです。大変だよ、今とちがつて。まあたくさんさんの艱難を――コリント後書11章に書いてあるとおり――畳みかけ書いてあるけれども、あれは大変な内容ですよ。簡単に読めない。それと比べると今の昭和元禄なんてのは夢見ているようなもんだ。だから、我々はみんな使命を持っていますから、それで行きましょうというわけです。

「我は言と業をもつて、微と不思議との能力において、および聖霊の能力において働き給いし事のほかは何も語らず」

と。これは全部、神さまが、キリストがなさったんだ。私はその僕であつたにすぎない、



手先になったにすぎないんだと。こういう境地は、今のいわゆる境地は、今のいわゆる民主主義なんてもんとはおおよそ違う。困ったものだね、民主主義なんてもんは。「神主」と言った方がいいんだ。神さまを主にしなければ。「神主義」だ。みんな神主さんだよ、我々は。神主人物、神主人。キリストの福音というものは、喜びの音信というのとは何が喜びかという、御霊の力がある喜びなんです、喜びの音信なんて言ったって。

²⁰我は努めて他人の置えたる基礎のうえに建てじとて未だキリストの御名の^{とな}称えられぬ所にのみ福音を宣伝えたり。

そうです。今の無教会でも、みんな同じ仲間でもってただ集会しているだけではダメなんだ、未開地に向って進んで行かなければ。まだまだ知りたい人がたくさんいるんだから。「お前が右に行くならば、俺は左に行つてやるぞ」というわけだ。「一緒に行きましょう」ではないんだ。

²¹録して『未だ彼のことを伝えられざりし者は見、いまだ聞かざりし者は悟るべし』とあるが如し。

内村先生は若いとき、かなりこれをなさったです。少し中年以上になると大手町あたりにおさまりかえつてしまった。それは人は集まってはきたけれども。

藤井先生というのは家庭集会だ。私がわるい真似しているけれども。藤井先生はそこらへ出かけて行かない。先生は「伝道」という言葉があまり好きではない。無教会は文書伝道が多いんだよな。わるくはないさ。特に活動的な人は大いに活動する。人によるから。非常に活動的な人は大いに活動し、沈潜してものを書く人はものを書く。いろいろ役目はあるさ。どれがいいのわるいのと言っているのではない。とにかく、いろいろな在り方をもつて福音というものを伝えていこうということ。

「私は何でもいから、どんどんパンフレットを配っていきますよ」

と。ああ非常に結構なことです。何でもやってください。

●キリストの中に抱きつくように自分を投げ入れる

²²この故に、われ汝らに往かんと為しが、しばしば妨げられたり。

ローマに来ようと思ったけれども。

²³然れど今は此の地方に働くべき処なく、且つなんじらに往かんことを多年、切に望みいたれば、²⁴イスパニヤに赴かんとき立ち寄りて汝らを見、ローマに立ち寄つていく。最後の目的は西の果てのイスパニヤなんだと。

ほぼ意に満つるを得てのち汝らに送られんことを望むなり。²⁵されど今、聖徒に事えん為にエルサレムに往かんとす。

まず行かなくてはいいかと。

²⁶マケドニヤとアカヤとの人々はエルサレムに在る聖徒の貧しき者に幾許か



の施与ほどこしをするを善しとせり。

この「施与」という字は「コイノニア」という字だな。

²⁷ 実に之を善しとせりまた聖徒に対して斯くする負債おいめあり。異邦人もし彼らの霊の物に与りあずかたらんには、

「与る」という字は「コイネオー」という字です。

肉の物をもて彼らに事つかうべきなり。

実際の物をもつて仕えなさいと。

²⁸ されば此のことを成し了え、この果を付わたしてのち、

「果」というのは御霊の果のこと。「御霊の果は何々だ」とガラテヤ書に書いてあるでしょ。

汝らを歴へてイスパニヤに往かん。²⁹ われ汝らに到るときは、キリストの満ち

足れる祝福をもて到らんことを知る。

まあ実に懇ろに書いてあるね。

³⁰ 兄弟よ、我らの主イエス・キリストにより、また御霊の愛によりて汝らに勧む、なんじらの祈りのうちに、我とともに力を尽くして我がために神に祈れ。

パウロの祈りは、取っ組むような祈りですよ。全身でもつて祈れと。

「心を尽くし精神を尽くし力を尽くし思いを尽くして主なる汝の神を愛すべし」

というのは、

「主なる神の中に自分を投げ入れる」

と言った方がいいよな。そうすると、ハッキリ分かるから。それが「神を愛することだ。我々が神を愛するということは、神さまの中に自分を投げ入れることさ。なにか愛の感情で神さまを愛するなんて、そんな大それたことができるかというんだ。自分を神さまの中に投げ入れているのが本当の全存在的な愛ではないですか。本当の恋人は抱きつくだろ。神さまの中に本当に抱きつくように自分を投げ入れることが愛なんだよな、キリストの中に。まあ乱暴な表現をしますけれども、仕方がない。そういうわけですよ。

そういうキリストへの捨身の体勢は、正直、無教会にはなかった。情けないね。だから、「信仰、信仰」と言っておさまりかえってしまった。そういう世界にこそ、キリストの言う偽善があるんです。

³¹ これユダヤにおける従わぬ者の中より我が救われ、又エルサレムに対する我が務めの聖徒の心に適かない、³² かつ神の御意により、歓喜よろこびをもて汝等にいたり、共に安んぜん為なり。³³ 願わくは平和の神なんじらの衆と偕いっしょに在いまさんことを、
アアメン。

「平和の神」ではなく「平安の神」です。平和というと、どうも横つちよの関係しか聞こえ



ないので困るんだ、私は。平安から平和だから。「シャーロームの神」という。あの士師記第6章のギデオンのところに初めて「平安」という言葉が出てくる。あの「平安」「シャーローム」は上から来ているんです。

「²²ギデオン是において彼がエホバの使者なりしを覚り、ギデオンいいけるは、ああ神エホバよ我面を合せてエホバの使者を見たればはた如何せん。²³エホバ之にいいたまいは、心安かれ怖るる勿れ、汝死ぬることあらじ。²⁴ここにおいてギデオン彼所にエホバのために祭壇を築き之をエホバシャロームと名づけたり。」(士師記6・22、24)

「エホバシャローム」というのは「シャーロームの神」「平安の神」ということです。

●力ある聖霊が内住すること

それから16章です。

「我ケンクレヤの教会の執事なる我らの姉妹フィベを汝らに薦む。²なんじら主に在りて聖徒たるに相應しく、彼を容れ、何にても其の要する所を助けよ、彼は夙くより多くの人の保護者また我が保護者たり。」

パウロはいろんな人の名前をあげて、一人ひとりを顧みている。非常にこれはその意味においては味がある。みんな兄弟姉妹のことをよく覚えてずっと書いてある。

3. プリスカとアクラとに安否を問え、

このアクラというのは天幕造りで、プリスカはアクラの奥さんだ。パウロは天幕を造りながら歩いていったんだからね。

彼らはキリスト・イエスに在る我が同労者にして、⁴わが生命のために己の首をも惜しまざりき。彼らに感謝するは、ただ我のみならず、異邦人の諸教会もまた然り。⁵又その家にある教会にも安否を問え。又わが愛するエパネトに安否を問え。彼はアジアにて結べるキリストの初めの実なり。⁶汝等のために甚く勞せしマリヤに安否を問え。

特に、プリスカとアクラ、マリヤ、それからこの手紙を持ってくるフィベは忘れてはいけない名前です。

⁷我とともに囚人たりし我が同族アンデロニコとユニアスとに安否を問え、彼らは使徒たちの中に名声あり、かつ我に先だちてキリストに帰せし者なり。

これは同じ獄舎にいたんだ。

¹³主に在りて選ばれたるルポスとその母とに安否を問え、

とたくさんあるわ。名前が20くらいあがっているね。16節に、

¹⁶潔き接吻をもて互いに安否を問え、キリストの諸教会みな汝らに安否を問う。



と、その愛情の表現も、「潔き接吻」なんていう言葉も出ているね。

²⁰ 平和の神は速やかにサタンを汝らの足の下に砕き給うべし。

と。²⁰ 節はちよつと強い言葉だな。

²⁵ 願わくは長き世のあいだ隠れたれども、今顕れて、²⁶ 永遠の神の命にしたが

い、預言者たちの書によりて信仰の従順を得しめん為に、

信仰によって従順に神さまに従うことが信仰であり、信頼であり、従順であるから。

もろもろの国人に示されたる奥義の黙示に^{したが}循える我が福音と、

パウロは²⁶ 節でもって「我が福音」という上にこれだけの言葉を冠している。永遠の神の命にしたがって、これは預言者たちの書によりて信仰の従順を得しめん為に。預言者たちがいかに旧約における神の選びの器であつたかということを意識している。そして、その預言者の音信がみなキリストを通して、「我が福音」という中に入ってきてしまっているわけです。「我が福音」というのは、もちろん、我がキリストから受けた福音ということ。パウロが自分でつくつたのではない。自分がキリストから受けたこの福音ということ。

イエス・キリストを述べる事によりて、

「福音」と「イエス・キリストを述べる事」は同じことさ。

汝らを堅うし得る、²⁷ 唯一の^{かしこ}智き神に栄光、世々限りなくイエス・キリスト

に由りて在らんことを、アアメン。

手紙は祈りをもって終っている。

まあ、ローマ書というのは大変な書簡です。パウロがローマ書一章で、

「信仰より信仰へ」

と言いましたね。信仰より出でて信に入る。限りなく展開していく。この限りなく展開していくのはこの聖霊の力です。「恵みより恵みへ」でも、「信仰より信仰へ」でも、「讚美より讚美へ」でも、全部これは聖霊の力がうちに来たときにです。だから、私たちは、もう一つ引っくり返して、「力ある聖霊」が――聖霊は力を持っているんだから――力ある聖霊が内住することが結局、一番大事なことです。

「エン・クリスト」(キリストの中に)

ということ、別の言葉で言う、聖霊を持つていること、聖霊を宿すこと、

「わがうちに御霊あり」

ということ。それは十字架という門――無門の門だ――十字架という無門の門を通れば、その聖霊を賜るところの現実には必ず来る。十字架をぬきにしては、聖霊は来ない。来たら危ないです、そういう霊は。贖罪の「キリストの割礼」、即ち贖罪の十字架を通して聖霊は来る。そうしたら、何を读んでも全部、掴めるですよ。

ローマ書は、おそまつながら、とにかく一年間で終わりました。どうぞ、ローマ書は繰り返し読んでください。終わります。

